

乳がん高度検診・治療センター

NEW—すNo.105

乳房温存療法での放射線療法

寡分割照射の対象が50歳未満の患者さんにも広がる

その1

乳がんに対して乳房部分切除術（乳房温存手術）を受けた患者さんには、術後残った乳房に放射線をあてる必要があります。従来は25回の照射回数が標準で5週間の通院治療が必要でした。ところが、50歳以上で他のいくつかの条件を満たす患者さんには16回（3週余り）で終了する寡（か）分割照射と言われる方法が容認されるようになり、当院でも2年前（2021年）から取り入れています（乳がんセンターNEW—す No.81参照）。患者さんにとっては治療期間が短縮されるという利点があります。その後、対象となる患者さんの制約が緩和され、当院でも寡分割照射の対象を広げましたので今回のセンターニュースで取り上げます。

乳房温存療法での放射線療法の意義

乳房温存療法での乳房手術（乳房部分切除術）は目に見えるレベルのがんを摘出するのが目的であり、顕微鏡レベルのがん細胞が乳房に残る可能性があります。こうした細胞レベルのがんを死滅させる目的で乳房全体への放射線療法が必要となります。摘出標本の断端を顕微鏡検査で調べた結果、断端あるいはその近くにがん細胞がなかった（断端陰性）患者さんに、放射線療法を加えた場合とそうでない場合とでは、放射線療法を加えることにより、**乳房内からの再発を約3分の1に減らせることが示されています。**

標準の照射と寡分割照射の比較

標準

標準的に行われていた放射線療法は、1回線量が2グレイ、照射回数は25回で合計線量は50グレイ、治療期間は休日（土・日・祝日）を含めると約33日でした

当院

当院での寡分割照射では2.66グレイ×16回、合計線量42.56グレイで治療期間は約22日と短縮され、患者さんの負担軽減につながります。

	1回線量	照射回数	合計線量	治療期間
標準照射	2グレイ	25回	50グレイ	約33日
寡分割照射	2.66グレイ	16回	42.56グレイ	約22日

患者さんの負担が軽減されます。

乳がん高度検診・治療センター

NEW 一すNo.105

乳房温存療法での放射線療法

寡分割照射の対象が50歳未満の患者さんにも広がる

その2

《寡分割照射》対象条件の広がり

乳癌診療ガイドライン*の推奨に基づき

- ・50歳以上
- ・腫瘍径5cm以下
- ・リンパ節転移のない浸潤癌(pT1-2N0)
- ・化学療法を受けていない

などの条件を満たす患者さんのみが寡分割照射の対象として容認されていました。寡分割照射の効果（乳房からの再発率を下げる）や晩期有害事象（治療後の副作用）は通常分割照射と比べて同等であり、治療期間中の放射線皮膚炎についてはより軽度であることがわかってきました。

その後の研究により、

こうした条件を満たさない患者さんを対象に含めても支障のないことが示され、昨年（2022年）改訂された乳癌診療ガイドラインでは年齢や化学療法未実施などの制限が外されました。

これを受けて当院でも50歳未満、あるいは術前化学療法後や非浸潤性乳管癌の患者さんにも寡分割照射を行えるようになりました。

*乳癌診療ガイドライン：乳癌の標準的な診療指針について日本乳癌学会が刊行しているガイドラインで定期的に改訂されている。現行のものは2022年版。

放射線科 川口善史
乳腺外科 稲治英生

ご不明な点がございましたら、乳がんセンター
あるいは放射線科にお問い合わせください。